



月刊部員新聞

2013年1月
第74号

編集・発行 Unit

暴力による指導

最近指導者による暴力や、パワーハラスメントが世間を騒がしています。なぜこのような事態になってしまっているのでしょうか。

コーチと競技者

本来コーチと競技者の関係は対等であるはずのもので、

コーチは勝つために最善の方法を考え出し、競技者に指導をする。競技者はその新しい考え方を試合で体現できるようにトレーニングをする。

どちらが偉いとかではなく、それぞれ立場で勝つためにすべきことを提案し、よりよいものを作り上げるというところが本来の関係だと思えます。それがどうしても上下関係になってしまうのは、日本のスポーツ指導者における現状があるからではないでしょうか。

うか。

日本の指導者

現在の日本のスポーツは職業としての指導者より、高等学校や中学校などの部活動という学校教育の一環として指導を行っている教員の方が圧倒的に多いのではないかと思えます。

中学校で約10,000校、高等学校で約7,000校にもなります。そのほとんどの学校で部活動があり、教員が指導をしているのが現状だと思えます。各スポーツ種目を合わせても、職業としての指導者はこれほどいるでしょうか。そうなる場合、教員と生徒という関係がそのまま部活動に持ち込まれ、必然的にコーチと競技者に上下関係ができてしまいます。

その流れがどのレベルにも当てはまるのではないかと思います。

職業とは何か

職業としての指導者であるためには、競技者には選べなければ生活をする事ができません。その様な立場であれば、暴力に訴えることはせずに、競技力を向上させる方法を見いだすはずで

また本当に指導をしてゆきたい。またそのことに自信があるのであれば、教員なり会社を辞めても、

指導者として充分やってゆけるはずで、

それをしないのであれば、レベルは関係なく趣味で子供たちのスポーツ指導をしている保護者とは何ら変わりはありません。

その様な人に指導を受けて、競技力を向上させることは果たしてできるのでしょうか。

暴力に訴える

スポーツの世界だけではなく、暴力に訴えるという事はあつてはならないことだ

と思います。

残念ながら暴力をふるわなければ指導ができないのであれば、それは指導者としての資質がないということではないかと思えます。

指導した内容が体現できないから暴力をふるう。それは競技者が悪いのではなく、指導内容が悪いから競技者が体現できないのではないのでしょうか。

競技者がレベルの高いことができないと嘆く前に、競技者に合わせた指導を行うことが先ではないでしょうか。

学習指導要領における部活動の意義と留意点

第1章総則第5款5(13)

生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。

Unit代表 澤野 博(さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部員となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。NSCA CSCS、JADA DCOなども保有。
ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。
0422-34-5055(Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com